

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

福島県立美術館には「ラッキードラゴン」という絵が収蔵されている(本誌四面)。縦に長い画面にベッドに腰をかける裸の男が大きく描かれただけの簡潔な画面と青色系の微妙な色調を持った美しい作品である。男は手にカードを持っている。そこには「私は漁師です。名前を久保山愛吉といいます。一九五四年三月一日、私たちの漁船福竜丸はビキニ環礁から八〇マイル離れた原子雲の下を航海していました。私たちは何が起ったのかわかりませんでした。その年の九月二三日私は被曝のため死にました。」と書かれていて、私たちはこの作品が第五福竜丸の被曝事件を主題にしていることを知ることになる。だが、この絵から聞こえてくるのは声高な抗議の叫びよりも、むしろ地球上の全ての生物を絶滅させる兵器をもってしまった現代の人間たちへのやりきれない思いをこめたため息である。ベッドにぼつんと腰をかけた久保山愛吉さんの口から「人間はなんと愚かなんだろう、なんと悲しいのだから」

## ベン・シャーンについて

伊藤 匡

う」というつぶやきが聞こえてくるような気がする。この絵の作者ベン・シャーン(一九八〇年九月九日)は、ソ連邦内のリトアニアにユダヤ人の子として生まれ、八歳の時に家族とともにニューヨークに移住した。一五歳の時から石版画工房で働きながら夜間学校に通い、そのかたわら絵や版画を学んでいる。画家として注目されるようになったのが、ドレフュス事件やサッコ・ヴァンゼッティ事件などの冤罪を主題にした連作であったことからわかるように、彼は一貫して人類愛と社会正義を訴えかけた画家であった。一九三〇年代の世界的な不況の時代には、アメリカの各地をまわって人々の日常生活をカメラで撮影し、アメリカの普通の人々のつましくも実り豊かな暮らしを描くという新しい主題を得た。第二次世界大戦中はナチス・ドイツの残虐行為を告発し戦争の悲惨を訴えるポスターなどを多く制作する。代表作「ラッキードラゴン」の連作は、最初はアメリカのハ

ーパーズ誌のイラストとして描き始められたのだが、やがて彼はこの事件の人類全体に及ぼす影響の大きさに気づき、一九六〇年に来日した時に焼津港をも訪れて事情を調べ、帰国後十一年の連作として制作したものである。今年の五月から一月にかけて福島県立美術館のほか新宿伊勢丹、岐阜県美術館など全国五会場でシャーンの回顧展が開催されることになった。展覧会の準備に追われる日々の中でテレビや新聞を見ると、リトアニアのソ連邦からの独立問題や、ユダヤとアラブの対立に起因する湾岸戦争など、シャーンが生まれ、生きた地域や民族に関わりの深い問題が、現在も解決されることなく新たな争いを生んでいる。差別、迫害、亡命、貧困、戦争などが取り上げた問題はすべて彼自身が体験したことである。その体験によって人間と社会に対する現実的な認識の眼を養いながらも、彼はあくまで人間への愛情と希望を失わなかった。彼の芸術は様々な問題を積極的に受けとめ、その中から自らの描くべき内容を見いだし、作品によって人々に何かを伝えようとする、ヒューマニズムの絵画とも呼べるものである。彼の生涯と芸術は、現代において誠実に生きたことの証しのように思う。(福島県立美術館学芸員)

## 一九九一年度の事業計画、予算を決定 ——協合理事会ひらく

三月二十六日、東京の学士会館で協会の第一〇二回理事会が開かれました。川崎会長ほか、先に選出された新年度の理事・監事全員が出席(一名表決委任)し、①一九九一年度事業計画②同予算③当面の活動計画について審議しました。事業計画では、展示館の管理・運営を中心に、来館者の増大、資料の収集、広報・出版活動の充実など、九つの項目にわたって重点計画を設定。学校の先生方との懇談会や、テーマ別の学習会の開催をめざすこと、ビキニ被害の全貌

と今日的意義を明らかにした啓蒙書の出版、展示館のポスターの作成を行なうことを決めました。予算は、昨年度の実績と大きな差異はありませんが、広報資料の製作費、会議費などを事業計画にあわせて増額、賛助会費、寄付金の収入増にもいっそうの努力を払うことにしました。当面の活動計画では一段落ついた展示館の修理にひきつづき、事務局・資料室新設等の拡充計画について、東京都と連絡を密にし、要請を進めていくこと、六月十一日(火曜日)に展示館開設記念集



ベンシャーン「ラッキードラゴン」  
(福島県立美術館)

会(午後六時・松本楼)を開くことにしました。

### 第五福竜丸へ

第五福竜丸の話を担当の橋本先生から聞きました。ビキニという島でアメリカの水爆実験がありました。それは、一九五四年三月一日のことでした。それで、とびうおやマグロや他の魚たちは、病気がかり、または、死んでしまったりもしたのです。第五福竜丸の乗組員たちも死の灰をあげ、病気になるてしまいました。無線長の久保山さんは、つまと三人の子どもを残して死んでしまいました。つまのすずさんはうったえています。「アメリカ婦人から、ほしい物があつたら何でも送るとありましたが、わたし達親子がほしいのは何もありません。ほしいものは夫の命だけです。子ども達に父親をかえしてやってください。戦争はやめてくださいが、夫の最後の声です。みなさん戦争をなくしてください。平和を守ってください。話を聞いた時は、みんながだま

次回(午後六時・松本楼)を開くことにしました。

りこんでしまいました。それでわたし達は、第五福竜丸にみんなで作った千羽鶴を送ることにしました。男子のなかで、鶴を折れない人もいました。けれどもみんなでも送るといふことから女子が教えてあげました。その後、とびうおのぼうやは病気ですのえい画も見ました。ぼうやは飛べました。だが、少したつてぼうやが飛んでいる時に死の灰がぼうやおをのせたのです。父さんととびうおは帰ってこない、ぼうやは病気で。母さんととびうおは泣き泣き父さんととびうおを待ったのです。「母さん泣かないで、ぼく病気が治ったら父さんをさがしに行つてあげるよ」ぼうやはいいました。「戦争がなくなるように」が飛ぶ日がくるように」などと思つて作つた鶴です。わたしたちの気持ちがつたわるように。お願いします。青森市立横内小学校四年四組(3・14着信)。

●ベンシャーン展会期・会場予定  
伊勢丹美術館(東京) 5・9~5・28  
姫路市美術館 7・13~8・11

福島県立美術館 8・17~9・15  
岐阜県美術館 9・21~10・20  
大丸ミュージアム(大阪) 10・13~11・11

### 十五年戦争期における焼津市の漁業(三) — 監視艇隊(黒潮部隊)について(2) —

高橋 鑛 逸

近代戦において、機動部隊を対象とする哨戒は、相手に捕捉されない状態で行うのが常識であるが、自己を敵前にさらして哨戒をおこなわせるこの漁船による監視は、まさに常識外れの戦術であり、「水上特攻船」といわれる理由である。

このような無謀な作戦計画と作戦矛盾に当焼津港の漁船がいかにかわったか二、三の事例を記しておく。

第五恵比寿丸は、一九四二年五月一日〇六〇〇時敵潜水艦一隻を発見交戦し、敵艦よりの砲弾一三発命中し艇長以下七名戦死二名重傷の記録があり、戦死者七名中軍属として徴用中の船長、岩崎満吉、氏の名前もみえる。第五恵比寿丸は損傷甚だしく僚船に曳航され横須賀にもどった。修理完了後再び監視にたづさわった一年後の一九四三年四月三日〇六四五時敵潜水艦に遭遇し、『我交戦中・我弾薬欠乏』など六通の無線を発

信し、一時間半にわたり交戦、消息不明となる(沈没全員戦死)。

農林徴用を受けた第八太平洋丸の場合は、一九四三年九月二十九日敵潜水艦発見を打電し、敵の攻撃を受け機関故障、戦死者船長以下三名、重傷者四名を出し横須賀へ辛うじて戻った。修理完了後再度任務につき、一九四四年五月二〇日南鳥島への物資輸送にあたり、帰路敵機の攻撃を受け燃料タンクに命中し海水がタンクに入り船体は四〇度傾き、四九日問太平洋の真只中に漂流し我軍の水雷艇に救助され浦賀に戻った(この船は農林徴用のため軍人は乗船せず、したがって武器の設置もなかった)。

第五福一丸の場合は一九四五年二月一八日の米軍硫黄島上陸作戦前日、敵機動部隊に遭遇し母艦・支援艦ともども撃沈された。母艦が撃沈されたためこの月の監視艇隊の記録は無いが、二十二戦隊の日記によると、この月の出動監視

記録には、一九四五年一月末在籍船三四隻中、二月二五日出動監視艇は新規徴用船一隻を含め一〇隻であり、二五隻が沈没したことになっている。

このような事例は数にいとまがない。しかしなぜこのような無謀な作戦が計画されたのであろうか。現在のところこの計画についての具体的な資料は見られていないが、最近の資料によると対米戦になった場合、哨戒線の確保を昭和五年、聯合艦隊南洋巡航に際して第二艦隊司令部の意見具申の中で、『監視線を遠洋漁船の利用によって確保する』という意見が出されていたことが明らかになった。開戦十一年前から既にあった程度の作戦計画が海軍関係首脳の脳裏にあったことは事実であって、これが一九四一年の艦隊編成に際して「漁船監視艇隊」として組織したのでと考えられる。

当時、軍・政府は遠洋漁業の漁船団は無線を設置しており十分有事の際軍用として役立つと考えて作戦機密事項として漁民には知らせず徴用し、この戦争に参加させたのである。

この調査に携わって、私見ではあるが、漁業者の国策に協力するという純粋な気持ちと裏腹に、軍・政府は「徴用ありき」を前提に「理不尽な徴用と戦争遂行」を行なったと考えられる。

戦争とは一つの突発的な事実関係から開戦されるものもあるが、大部分の戦争は何年も何十年も前から計画されるものであるというのが本音であると思われる。

今回の「湾岸戦争」などもイラクの侵略に始まった戦争ではあるが、アメリカの対イラク作戦をみるかぎり前から計画された作戦であったと思われる。

いずれにせよ、「戦争は人類最大の敵」であり、とりわけ当焼津市においては、この徴用船と徴用漁船員の犠牲に続いて、一九四四年の「第五福竜丸」のビキニ水爆実験による犠牲は、海に生きる「漁業の町焼津」の忘れぬ事件である。

二度とこのような戦争のなきよう、また遠い彼の地で犠牲になつた方々のご冥福をお祈りいたします。

終わり  
(静岡県近代史研究会会員)

### 平和を求めて(一)

杉の子会と私



斎藤 鶴子

戦前、戦中、戦後と生きてきた私。ときおり戦後私は何をしてきたのだろうと自問することがある。戦後しばらくは子育てのあけくだけで、やっとPTAに出かけた

り、朝日新聞の「ひととき」に投稿するなど、少しは社会に眼を向けるようになった頃、第五福竜丸ビキニ被災をきっかけに「杉の子会」に入り学びながら原水爆禁止運動に心を注ぐようになった。

杉の子会はビキニ被災の前年一九五三年十一月、杉並公民館の館長であった安井郁先生を囲んで、四〇代の二十四人の主婦を中心に社会科学を学ぶ会として発足した。私が入会したのは翌年の八月で、E・日カールの『西歐を衝くソ連』を読むことに決ったときだった。

先生が常々申されていたことは「主婦の社会的開眼」であり、育ちゆく子供の話相手になれるように謙虚に学ぶことであった。

私は何か新鮮な気持で一カ月一度の読書会にはかさず出席した。教室のあり方は「時間励行」出席者順に前の席に「発言中の私語禁止」などで、先生はその励行者だった。先生はときおり、唯物弁証法などむづかしい言葉を出されたが、私は学ぶ中で、歴史的条件的社会的条件の接点でものを考える大切さを教えられたと思う。勉強のあいまに私たちの気持をほぐすため「肩を横へて冷かに千夫の指に對し、首を俯して甘んじて儒子の牛となる。魯迅」と黒板に書かれたり、ガリレオが宗教裁判で「やはり地球はまわっている」といったという有名な言葉を歴史的審判のよき例として話された。また、「卵と石ころ」の例をあげ、自分

は、みなさんそれぞれのもって生れた素質を十分に引きだし、磨くための手助けをしているのだと話された。私は、教育とは、育てる心とは、本当にそのようなものであると思つた。

十年間に読んだなかで最後の本

毛沢東の『矛盾論・実践論』は感銘深く、私は杉の子の機関誌に、「認識の発展について」という感想を書いている。この本はともと毛沢東が国共合作の翌年、国内外の危機に立ち、あらゆる困難をのり切つて国内の統一をしてゆかねばならないという歴史的背景の下に書かれたものであり、私には重点のおき方に難解の部分もあった。人間の認識の生れる条件を考える時、科学の加速度的に発達している現在、なおさら未来を予知することは困難と思う。しかし、私がここで学んだことは、感性的認識から理性的認識に進むことで終るなら、残りの半分を見おとしたことになる。大切なのは実践であり行動である。学び知つたら不十分であっても真実を求めて平和のため役立つと思う行動をする以外に道はない。と、思ったことである。

一九六四年、安井先生は原水爆禁止日本協議会の理事長をやめられ、杉の子会も原水協への加盟を中止し、同時に読書会もなくなつた。私は大変残念に思つたが、私草の実会員であることを知っておられた先生は「斎藤さんは草の

実会の中で原水禁運動を続けるように」と勇気づけて下さった。

五年後、杉の子会は機関誌最終号を発行した。先生の巻頭文「有終の美」や会員の消息を伝えている。私は「三つの手紙」という題で、(一)ラッセル平和財団の平和シールを拡める運動に協力している宇都宮市の高校生菊地良友君にあてた手紙、(二)久野収氏の論文「核の傘に変わる非武装的防衛力」について質問を出した手紙、(三)「深夜通信」を個人で発行し続けているジャーナリスト久米茂さんにあてて大学紛争について知りたいことを問合せた手紙、を紹介している。こうしてその後の私は、ラッセル財団支持運動や、草の実会その他で平和への願いを生かし続けることができた。

読書会はなくなつたが、杉の子会はときおり集って安井先生のお話をうかがった。社会的に幼なかつた私たちを懇切丁寧に教えてくれた見守つて下さった先生は、一九八〇年三月になくなられた。先生のなくなつたあとも、杉の子の生れた十一月には、安井田鶴子さんを囲んで旧交をあためている。

(第五福竜丸平和協会理事)